



# News Letter



竹内緑を支えるルワンダの会 No.21(2023年3月)

「今日も明日も明後日も、自分の道を歩む（進まねばならない）」（ルカ13：33）

・・・ルカのイエスは、エルサレム的一本道をまっすぐに進まれる。それは十字架に向かって。十字架を超えて復活まで。まわりは気を散らす出来事が始終起こるが、自分の道をしっかり歩み続けたい。明日も変わることなく。（英隆一朗神父）

今年、私がアフリカと関わって30年目になります。と言っても、30年間アフリカに滞在したわけではありません。1993年ソマリアへ派遣されて以来、延べにして8年余り不在の時がありましたが、それ以外の時間のほとんどをアフリカで生き、働いて参りました。道に迷った時はその都度、神さまに聴き、その集積がこのような時間になったように思います。平坦な道ではありませんでしたが、神さまに導かれ守られて今日まで続けられたこと、歳を重ねたことに感慨を覚えます。冒頭の言葉のように、自身に託されたことを、真剣に誠実に成してゆきたいと思いを新たにしました。

## ルワンダ版「父帰る」

受益者の中に、DV（家庭内暴力）で助けを求めてきた女性とその子供たちがあります。最近、その一家に起きたことについてお伝え致します。

2015年2月、「夫に殺される・・・」と助けを求めてきた女性をシェルター（現在のセンター）へ迎え入れて、この家族との関りが始まりました。

3か月余りシェルターへ住んだ後、夫が迎えにやって来て彼女は帰宅します。その後、二人は和解し、ご夫妻共に働き者であったため経済状況は改善し、みすぼらしかった家は立派になりました。そして、彼女から「もうイタベホの支援は無くて大丈夫・・・」と申し出があり、食糧などの支援は1年余りで終了しました。

やがて彼女独自のアイデアで、自宅の一室を店舗にして雑貨商を始めました。近隣に店が無い等立地条件が良かったため、一日の売り上げは、かなりな額だったようです。このように、状況は好転したかに見えましたが、長くは続きませんでした。

ある日、夫が都市部へ職を求めて出かけたまま帰って来ませんでした。つまり、外に内縁の妻を持ち正妻の元へは帰ってこない状況になったのです。そればかりか、時々リマの家に戻って来ては無断で金品を持ち出し、そのため正妻は、貴重な収入源であった雑貨商を閉店しました。

正妻と夫の間には3人の息子がおり、当時長男は10歳余り、その頃より彼は母を助けていました。ある日、私がリマでの仕事を終え帰宅の途上バスを待っていると、「みどり」と声がしました。

振り向くと、何とこの長男でした。彼は、母に代わって遠くまで水汲みに、20リットル入り容器2つを自転車に載せて引いているのでした。40キロの水は、当時小学生の彼の体重より重い物です。母を助けて、けなげに生きる少年の姿が胸に迫りました。

夫失踪後、イタベホは経済的支援を再開し、妻の意志であり希望であった離婚の調停をしようとしたのですが、手続きは遅々として進みませんでした。

ところが昨年10月、突然夫が正妻の元に帰ってきました。失踪後、実に5年の時間が過ぎていました。この連絡を受けてから2週間後、イタベホは会議を招集しました。参加者は、妻、夫、長男、地域のリーダー（日本では民生委員に当たる）とイタベホのスタッフたちです。参加者は一様に険しい表情で、緊張感が漂っていました。

長男に尋ねました、「あなたは、帰って来たお父さんを受け入れますか」に対し、彼は多くを語らず、「受け入れます」と言いました。

イタベホ：（夫に対して）「あなたは外に何人の女性と子供を有するのか」

夫：「2人の女性と3人の子供がいる」

妻：「夫を受け入れました。しかし、大変難しい判断であり苦渋の決断でした。なぜなら、現在住んでいる家は夫の名義であって私のものでは無いからです」

イタベホ：「あなた（夫）は、身勝手だ。どのような言葉と行為をもって妻と子供たちに謝罪したのか。あなた（夫）の誠意を見せて欲しい」

地域のリーダー：「嘗て毎晩のようにあった夫の暴行によって犠牲者が出ることを危惧していた。夫の家出によって、この地域に平穏が訪れたことを喜んでいて。夫の不在中、妻は良く働き、子供を立派に育て、不義などなく立派であった。子供たちはDVの被害者であり、トラウマを負っている。子供たちが成長した今、なぜ帰って来たのか、夫に問いたい」

妻：「地域のリーダーの前で、告白し、謝罪して欲しい・・・」

夫：「過去を見ないで、未来を向いて生きてゆきたい」

イタベホ：「過去を見ないで将来について語ることはできない。夫の行為の結果が、外の3人の子供であり2人の女性の存在である。どのように責任を果たすのか、これを避けて、将来について語ることはできない」

3時間余りの会議は終了しました。

その1か月後、面談をするため妻をセンターへ呼びました。この日の目的は、彼女に「状況がどうであれ、イタベホはあなたの側に立っている」ということを伝えたかったのです。何故なら、イタベホのシェルターであるセンターは、現在一杯で、母子4人が暮らす余地はなく、申し訳なく思っていたからでした。

ところがこの面談の日、彼女はさわやかな表情でセンターへやって来ました。彼女は言いました。「あの会議はとても嬉しかったです。何故なら、私は独りではないからです・・・」更に続けて、会議の後、地域のリーダーがご夫妻を前にして言ったそうです。「妻には、家族がいる。あなた（夫）が依然として変わらないのであれば、家族があなた（夫）と母子4人を引き離すことでしょう。あなた（夫）は、このことを銘記し行動するように・・・」と。

この「家族」とは、妻の肉親ではなくイタベホを指しているのです。このことは、具体的な打開策を提示できなくても、寄り添うことによって精神的支援となり得ることを、教えられた印象的な出来事でした。

この手紙がお手元に届くのは、桜が終わって春たけなわ・・・という時期でしょうか。どうぞお元気で過ごしてくださいように。世界の平和を祈りつつ。

2023年3月 キガリにて

竹内 緑



妻が一時避難をしていたセンターから帰宅した後のご夫妻と筆者（2015年）



ご夫妻が和解し、家を修復して状況が改善した時期の家族（2016年）

## 祈りの課題

---

以下のお祈りをお願い致します。

1. 受益者である子供たちが、「神を愛し人を愛する人」として成長しますように。
2. 2023年の活動費が与えられますように。
3. 受益者（大人も子供も）、病気や事故、種々の誘惑から守られますように。
4. 私をはじめスタッフたちが、この働きにふさわしい者として整えられますように。